

九条本『諒闇部類記』翻刻(一) 付解題

三輪 仁美
神戸 航介

(解題)

当部図書寮文庫所蔵九条本『諒闇部類記』(一冊、函架番号 九・五二五二)は、建春門院・四条天皇・後白河上皇・後嵯峨上皇の崩御に伴う葬礼の関連記事を諸記録より抄出した部類記である。横長の袋綴冊子本で、法量は縦約一三・〇センチ×横約二一・〇センチ。墨付全一〇四丁、遊紙が後ろに一〇丁ある。青色の表紙に九条道房の筆による打付の外題「諒闇部類記」がある。第一丁が元表紙で、右下に「禪閣兼孝公真跡」、左上に「亮闇部類記」とある。

本書に収録される記録は以下のとおりである。

山槐記 安元二年七月八日(二十九日条(建春門院))^(一七六)

定能卿記 安元二年七月八日(三年七月十日条(建春門院))

信範記 安元二年七月八日(八月二十日条(建春門院))

冷相記 仁治三年二月五日(三十日条(四条天皇))^(二四二)

山槐記 建久三年三月十三日(四年三月十五日条(後白河上皇))^(一九七)

実冬卿記 文永九年二月十七日(三十日条(後嵯峨上皇))^(二七二)

いずれも流布本の目次記や他の部類記等の中に見られない、未翻刻の逸文

記事である。また、管見の限りでは、「諒闇部類記」「諒闇記」等の書名を持つものの中にも本書と内容のものは見当たらない。本書でしか知り得ない情報も多く、これらの記事の分析により、平安末期から鎌倉時代における天皇・上皇・女院の崩御における一連の葬礼の儀制を詳細に知ることができる。そこで、ここに紹介・翻刻を行ない、当該研究分野に新たな素材を提供したいと思う。

まず本書の由来については、以下に掲げる三つの識語により知ることができる。

【識語①】第四八丁裏。建春門院崩御の山槐記・定能卿記・信範記、四条天皇崩御の冷相記の後にあり。

右山槐記 安元二年七月八日辛亥、後白河院妃建春門院崩御之記、次定能卿、同時
 範之記者、同安元二年之度国并同月十日、新院号六、崩御之記、次冷相記 冷泉相
 公、仁治三年二月五日、之記者、四条院同年去正月九日崩御之記歟、可尋決之、甘露
 年二月五日、

寺前按察使親長卿之由可書也、今度件之自筆之書予兼孝、拝見之、仍令模写之而已、

皆文祿癸巳暮春上旬

准三宮前大麓

【識語②】第一〇二丁表。後白河上皇崩御の山槐記、後嵯峨上皇崩御の実冬卿記の後にあり。

写本六、

建久山槐記借用中院重相、文永冬実卿記借用四条前黄門写之畢、于時文

明三年三月十三日終功畢、

按察使親長

【識語③】第一〇二丁裏。識語②の後にあり。

右山槐記、建久三年三月十三日、寅剋太上法皇崩御御年十六、之記、同建久三年四月十一日、寅

院崩御之記、次冬実卿文永九年二月十七日、之後嵯峨院崩御等之旧記者、甘露寺

前按察使親長卿之自筆之書也、予兼孝、一見之刻令書写之畢、皆文祿癸

巳暮春下旬准三宮前大麓

識語②によれば、本書の原本は甘露寺親長の編によるもので、建久三年山

槐記は中院重相(中院通秀か)所持本、文永九年実冬卿記は四条前黄門(四

条隆量)所持本を文明三年(一四七一)に書写したものである。そして識語

①③によれば、本書は甘露寺親長自筆本、おそらくは二冊に分かれていたも

のを、文祿二年(一五九三)三月上旬・下旬の二度にわたり九条兼孝が書写

したものの、ということになる。冒頭の山槐記の前に「諒闇部類記」、識語

①の後、山槐記の前に「諒闇記」と内題があることから、甘露寺親長自筆

本は二冊に分かれていたことがうかがえる。

本書所収の記録内容は極めて大部であるため、紙幅の都合上、翻刻は数回

に分けて行なうこととする。今回の(一)では、安元二年山槐記・同定能卿記・同信範記の翻刻を載せる。

山槐記は藤原忠親(一一三一〜九五)の日記で、刊本は流布本を底本とする史料大成本があるが、安元二年七月記は含まれていない。古写本・逸文は石田実洋ほか「山槐記」古写本の解題と翻刻(『東京大学史料編纂所研究紀要』二七、二〇一七年)で網羅的に紹介されており、本書所収記事の存在も指摘されている。

定能卿記は「心記」とも呼ばれる、藤原定能(一一八四〜一二〇九)の日記。建久三・四年記の諸写本の存在が知られ『歴代残闕日記』に収められている他、古写本として治承二年記や『定能卿記部類』十巻が当部図書寮文庫九条本にある。しかし、いずれも本書所収記事は含まれていない。

信範記は平信範(一一二〜八七)の日記で、「兵範記」「人車記」の名で広く知られている。自筆本・古写本が陽明文庫に二十九巻、京都大学附属図書館に二十五巻あり、刊本は自筆本・古写本を底本として流布本により欠を補った史料大成本があるが、安元二年七月・八月条は含まれていない。なお、当部図書寮文庫所蔵九条本『凶事類記』(函架番号 九・一四二)に、「平兵部卿記」として安元二年七月十日条の一部が収載されている。同書には他に光雅記・不知記・頼業真人記・俊経卿記が含まれており、いずれも建春門院崩御に関する記録である。

建春門院平滋子は後白河天皇の女御で高倉天皇の生母にあたる。その崩御から葬送・追善に関しては玉葉にまとまった記録があり、それによれば、建春門院は安元二年七月八日に崩御し、十日に葬送儀礼が行なわれている。十二日には遺令奏があり、高倉天皇が倚廬に御している。その後七日ごとの追

善供養があり、翌年七月十日に諒闇明けの大祓が行なわれている。なお、この間の七月十七日には六条上皇も崩御している。

本書所収の山槐記・信範記では、崩御当日の模様替えや葬送当日の入棺・出棺、墓所における埋葬の詳細が記されており、玉葉には見られない具体的な所作を知ることができる。特に葬送当日の山槐記に「今夜儀只如在之体也」、信範記に「以女在儀渡御」とあるように、建春門院の葬送儀礼が所謂「如在之儀」の形式をとったことが判明する点が重要である。建春門院は夫である後白河上皇と共に居住していた七条殿において崩御したが、出棺の場である寝殿東渡殿南面の廊を崩御の所とみなしたようである。

一方、定能卿記は比較的簡潔な記事が多いが、諒闇にあたり椽宣旨の発出以後に貴族が着用する諒闇装束についての詳細な記述が注目される。いずれにせよ、平安時代後期における一連の葬送儀礼の具体的なあり方を復原する上で極めて貴重な史料であると言えよう。

(凡例)

一、本稿は、九条本『諒闇部類記』の翻刻を行なうものである。(一)では、安元二年(建春門院崩御)の山槐記・定能卿記・信範記の翻刻を載せる。

一、翻刻にあたっては、おおむね底本の体裁に拠るが、原則として平出・闕字等は連書し、字形は常用体を用いる。また、原本に存在する首書・貼紙は省略する。

一、翻刻にあたり、新たに読点(、)・並列点(・)を施し、翻刻者の加えた註記のうち、底本の文字に置き換えるべきものは「」、その他の校訂註および説明註は()をもって括弧する。

一、その他、右述の点も含め、基本的に皇室制度史料に倣う。

一、山槐記安元二年七月八日条から同月十六日条を神戸航介が、同月十七日から二十九日条および定能卿記・信範記を三輪仁美が翻刻し、両者で校正を行なった。解題は神戸が執筆した。

(翻刻)

〔元表紙〕 禅閻兼孝公真跡

亮闇部類記

第八十、高倉院 諱憲仁、治十二年、治承五、正、十四崩、廿一、母建春門院、兵部大輔贈左大臣時信女、

嘉応

二

承安

二

三

四

安元

二

治承

七月八日 辛亥、建春門院崩御、山槐記有之、

諒闇部類記

建春門院崩、後白河妃、高倉母后、

山槐記

安元二年七月八日、辛亥、天晴、未剋閭巷下人等云、建春門院已崩御、年卅五、御真偽未詳之間、路頭周章、車馬馳走、即參七条殿、門内・門外成市、右中弁経房朝臣曰、御惱危急、今朝御絶入、只今聊令直給、召諸壇、阿闍梨相率伴僧等驗渡御物氣、然而不快、渡御誦經及五十余所、重御衣日来御祈尽申、所殘^{厚之}原御衣・二御衣・御唐衣・表着・裳・綿衣・御手箱之類皆以祈之、以待序官等為使、太神宮料遣祭主卿、如七大寺各遣別当許、至于大將軍堂行之、諸社被猷御馬、然而更無其資歟、凡堂上・堂下鼓騷不止、及申剋可有行幸之由、被仰下、今夜本自為御方違可幸三条殿、^{烏丸棧敷殿也}而改彼儀、今可幸此院云々、藏人左少弁兼光奉仰触人々、仍上下皆以退出、予依脚病、近年不騎馬、依不可供奉猶祇候候之間、權律師印性^{御室近習人也、御室令候御所給、御}自御所走来曰、已成合致了者、雖不及左右未聞一定、而只今可有行幸云々、予不改裝束、西剋退出、秉燭之後或者告来曰、不可有行幸、一定崩御畢云々、未剋許令直之後有御出家云々、仁和寺御室為戒師、或人曰、御室不令參會、仏殿房聖人許候云々、可尋、權少僧都実修^{山御乳母若狭局為猶子之人也}奉剃髮、相計行幸停止之程、及西剋崩給畢歟、僧皆退出之後式部大輔為定下御所南面御格子、^{七条殿寢殿東北廊也云々}予又馳參、^{行幸停止未聞及之間着束帶、仍不改之馳參}事已一定、如夢如幻、退出人々又帰參、或束帶、或布衣、近年之政、偏在女主多令善政給、貴賤愁難如哭父母、今夜奉改御枕覆平絹生御衣云々、左衛門督宗盛、別當時忠、左中將知盛朝臣、左少將時実朝臣・權右中弁親宗朝臣・權少僧都実修勲此役云々、前太政大臣殿^{立鳥帽子、直}衣、^{前駟在後、雜色二人取松明在御車前}令參給、退出之後有召、右中弁経一朝臣差序官令申其旨、予又乘共侍於馬馳帰花山院畢、前駟未退出之間云々、即又令參給、左大臣・内大臣・右大將^{重盛、已上冠直衣}、被候公卿座、相国同令候給、別当奉院旨被奉招、太相国令候院殿上給、別当被申云、今日重日、^{後白河}明日院御衰日、明後日可有沙

汰也、但先年被然^{可之}御墓所被建立、其功已終、被奉讓彼所如何、又御仏経・御棺院料皆被設置之間被用如何、各尤可然之由令申給畢、此外無殊事、大理一兩度往返之後、大相国令退出給畢、予又退出、後聞、亥剋奉改御座、本南枕、御座乍奉臥床令撥廻、頗寄御座間東方北枕立座、親宗朝臣以刀放御座面撥下御座間中央、生御小袖・単、白合御小袖・単、白合御衣許着御、^{本自着御}以輪久為御枕、^{反時持用輪久云々、件輪久召河内守光遠云々、朝不令遊御長也、先々用双六、御座東南西三面立五尺御屏風、東方屏風二帖引チカフ、北方不立之、^{障子、北方有}當御枕上奉立御仏、^{御眼閉時奉立御仏也}其西方立経机一脚、其上居大火舍燒名香、御仏東方供掌燈、北面、御屏風外火取七八口燒薰物不^{不見}女房等候屏風外、仁和寺宮実修僧都又於此所念誦云々、九日、壬子、天晴、已剋着布衣參七条殿、触事如夢、昨日重日、今日院御衰日、仍御後事無沙汰、明日可有沙汰云々、頃之退出、今日參入七条殿人、着冠之人纓不同事、}

五条中納言^{直衣、卷纓}
 頭弁長房^{直衣、卷纓、基親云、柏挟也、崩御日卷纓・柏挟有兩說者、後日光雅云、頭弁卷纓也、而緩卷之間解也者}
 中務權大輔経家^{束帶、垂纓、後日見之、卷纓、此事可尋、亡者御座之時卷、葬礼之後垂纓歟、又不依葬前後卷纓之說也、背西如何}
 藏人左少弁兼光^{束帶、卷纓}
 藏人勘解由次官基親^{同告遣使於大原殿親入道許問之、卷纓之由、被示送、仍所卷也者}
 此外人皆布衣、

今日參内人々纓不同事、後日伝聞、
 関白殿^{頭書アリ}垂纓、
 右大臣^{卷纓參内、而関白殿被仰不可然之由、仍忽被垂之云々}
 五条中納言^{邦綱、卷纓}

殿上人皆卷纓、長保、東三条院崩御日參內人皆卷纓、寬弘、冷泉院崩御之時參內人皆卷纓、依彼等例歟、

〔頭書〕
「関白八基房公也、」

十日、癸丑、天晴、今夜建春門院有御葬送事、着布衣、申刻參七条殿、前太

相国立帽子、令候給、又花山納言兼雅、被候、予參入之後納言起座、為改装束、

取打梨子候御供養座、改着歟、頃之別當時忠、自北面方來被候相国御前、招右京大夫泰経朝

臣垂纓、院御方御着服之間事被尋、申云、待賢門院崩御之時鳥羽院着御例也、

御服所調御錫紵、便宜所砌下供御座、立廻御屏風、吉方開口可着御也、

後日中宮大夫隆季、云、御服所事左京大夫脩範沙汰也、相尋彼人之処、本

自御錫紵之儀止畢、不調進也者、如泰経朝臣申状者、臨期止之如何、可尋、

件年記、親隆・範家卿記子細粗所見也、且又差使於大原遣尋民部卿入道親龍

許之処、被申旨大概如此、但為御遁世之後不着御錫紵、又何事之有哉之由、

所示送也者、然而任鳥羽院例可設御座於砌下事、御所便宜思惟沙汰之間、泰

経朝臣參座御所申子細歟、卿来申太相国云、先例、若有不着御錫紵事者、不

可出御砌下之由、所思食也如何、相国令申給云、不令着給何事之有哉、泰経

朝臣又申云、黑衣御衣只堂上便宜所可着御歟、相国被仰云、可然也者、院仰

趣非可性事、只御愁歎尤切之間出御簾外、猶不令堪然歟、評定之儀只随當時

之宜歟、凡者背着服之儀、予雖存此旨、不預問過事不可口入、仍閉口、黒染

御衣於御所庇令着給云々、西光奉勲御裝束云々、右馬権頭信基来公卿座云、人々皆令退出

給之由有仰者、仍前大納言実定・藤大納言実国・治部卿光隆・新宰相朝方

等退出、太相国覽可令候給云々、予又同可候之由有仰云々、仍祇候之由、花

山納言被參入、門々檢非違使同之禁雜人乱入、御共公卿・殿上人被定員数云

々、御前僧等參入之間、喧嘩無極、有御入棺事云々、左中将知盛朝臣、左少

將時実朝臣、権右中弁親宗朝臣・時家朝臣、権少僧都実修、故伊実卿子、御乳母

外人・阿闍梨性、御姉冷泉局子、其父法橋覚真云々、已上六人勲役云々、後聞、一昨日直御枕之

時左衛門督別當備其役、御入棺之時彼六人同可勲也、而公卿勲御入棺役事無

先例、仍時家・性、加此役也、剋限知盛朝臣奉仕御湯殿、土器入水、以權杖奉灑云々、庁官

四人昇御棺、件御棺法皇万歳之後御料被造置之、今被奉讓也、黒漆蓋立牙、仍無打釘

代大藏大輔宗家相副之、入屏中門置御所南簀子、役人六人昇之、御座東方奉

相並案之開蓋、親宗朝臣取敷物、生絹二階、四幅、長二尺、件敷御棺内、撤御衣奉

覆生御衣、平絹合也、御小袖雖可奉撤、其間可無骨、仍如元着、知盛・親宗等朝臣切放御

畳面、役人六人乍御筵昇之奉入御棺、御筵不可入也、然而奉入御身体許可有無骨事云々、仍只乍筵奉入畢、其上奉覆

野草衣、生絹二階、三幅、長一丈、当御顔・御手等之所、其上奉引懸御裳、生絹、出家

上御衣、同、其上置御袈裟、同、已上三種召絹於、女房如之、唐札縫之、

波、尊勝陀羅尼宝篋印・陀羅尼光明真言各別納竹筒奉立御枕方、扶立御筵敷物等之間、御

護一尋常時令懸御護也、置御枕方、菩提子御念珠一連置御手辺、糸・針置傍御私篋、

御跡方不被奉入主上御尼勝云々、於内裏関白殿令尋此事給云々、子息尼勝入云々、然而役者無其沙汰歟、仍不炊入之、此後奉覆

蓋、不打釘、其上有打覆、生絹四幅、長一丈二尺、其心布搦之、四丈白布二段、三階許帖之、二所搦之、

筋末在御右方下、件布末為付御車体立彫所也、親宗朝臣弱之、此後有每日御仏供養、先上寢殿、三間面西、東

南西二面格子撤御簾、母屋三間東南西庇放出並戸五間、母屋三間東、西庇各一間、東庇二

个間、母屋巡也、南第一間、懸黒染御簾、二日面三間出之、黒染帷紐尺、每間懸彩幡、

帖為僧座、母屋中央間立仏台、奉懸二幅阿弥陀如来像、其前立花机、備香机

備香花、其前立机置御經、花机左右立灯燒台各一本、僧座前經机十二前、南方東庇

座四前、西庇座四前、同置御經、西經西庇座北最末座前、立磬台、南簀子当中央間立散

花机置花筥、有覆・地鋪、南階西二個間西孫庇三個間敷高麗帖為公卿座、僧

座前供掌燒三本、南方東西座、此座各一本也。御前僧十二口、權大僧都親智、權大僧都勝憲、權少僧都法眼尊隆、權律師範玄、阿闍梨、行乘源運、權少僧都直円、權少僧都行乘、亥遍、阿闍梨明慶、大式君公胤、被始御供養、勝憲、着申袈裟、鈍色袈裟、余僧、褐色袈裟、白五帖袈裟也。為御導師、太相国・花山納言・予着御前座、事畢賜布施、兵部卿信範卿自御所方出

來行此事、木工頭親雅同行之、導師被物白被調置歟、花山納言取之、絹裏殿上人取之、僧綱裏物予・兵部卿・左京大夫 脩範、等取之、此外殿上人取、依

人数少末方一人取兩三人料、次被始例時親智為調唱僧退出、參向御墓所、華

王院東北、自御平生時占件地被立御堂、備後守為行募重任功造營、而此四五年之間未造畢、纔
返葺許云々、四面築垣未築一本、法皇逆鱗云々、院御料法花堂在其南、造營已畢、然者以此所

為女院御墓所、以女院御料所法皇方歲之後可為御墓所之由、一昨日内議了、而仁和寺宮令申給
云、院御料已設阿所、尤可有憚、不可候也者、仍又忽召集數百人工、不日造營、但少々事不成云

々、四方築垣大略築畢、本門北向ニアリト云々、令改東方云々、但石辛櫃蓋以十余人力可覆、
件石有五果云々、鳥羽為行賢門院等御墓所蓋石、以輓轆下之、而半作之間、未及其沙汰、役人

力不可叶云々、太相国猶令候御前座令奉見、出御之故歟、納言・予候公卿座東
可寄倚歟云々、篋、上括、被候中門廊、時剋、時成、然寄御車、常所駕御之

簀子辺、入道太相国、被候中門廊、時剋、而閑歟、寄御車、御車也、前

方簾懸簷下透其所下也、簾塞後方、自簾半許引入懸簾、頗引下、懸歟、月輪所見也、御牛黃也、序官簾之、今夜儀只如在之体也。於寢殿東渡殿南面、件廊即

也、左衛門督・宗盛、別當時忠、候御車寄、立几帳、屏風如例、御幸之時侍八
人取松明、無前火、知盛朝臣以紙燭付御枕上、大賜件指燭帷、候御車前、奉昇居御棺於

御車内、役人六人、御入棺人親宗朝臣、時宗昇御跡方自御車前方出云々、以
御枕方為為後也、以御棺搦布末結付体、立奉居之後懸御牛、左衛門督 宗盛、

別當時忠、兵部卿 信範、左中将知盛朝臣、右中弁經一朝臣、左少將時実朝臣、
左馬權頭信基朝臣、權右中弁親宗朝臣、木工頭親雅、右少將時家、皇后宮權

亮為頼等候御車後、皆着布衣・藁沓、經房朝臣一人着服、大理時実朝臣於御墓所可着云々、
待賢門院御時、德大寺右府路間着布衣、法金剛院ニテ改着云々、自余憚、日次不、東屏中門自馬場南行入御、置御所西面唐門、出同御所東門入御之、
墓所東門蓋御車出御堂云々、後聞、役人六人奉昇下御棺下三所懸布、奉下石
辛櫃内引取懸布、奉覆石蓋、件石六人力不可叶、仍經一朝臣・親雅・河内守

光遠・大夫尉遠成相加覆之、其上土石等近御侍等置之、北所面放取之、御座日

來御寢床御乘摩休等、別當仰左衛門督為政・実重偷破床、此間相国殿・納言

及下官愕然祇候、右宮被奉居造立等身阿弥陀如来像・三尺觀音勢像、御經十
二部置經机、又一日經一部分置之、半漏、月入之後、僧侶御墓所歸參、頃之被始御

仏供養、是初日御仏歟、每七日觀智為御導師、事畢賜布施、太相国令取被物白、
可有供御、々仏同之也。給、木工頭親雅伝之、殿上人取裏物、按察已下取僧綱裏物、次有一日經分御

布施、取被物、殿上人取裏物、花山納言以下取僧綱紙裏、此御布施雖僧綱皆絹裏

取之、仍事畢相国御共退出、今度御仏供養、資賢、布衣、左兵衛督、成範、直衣、卷、又被

始例時懺法、実慶弟子二人、行乘弟子一人云々、後聞、右中将通親朝臣為勅
使、及深更參御墓所云々、此事兼無沙汰、臨期沙汰云々、御使三个度可有歟、

今夜只一度云々、頭弁長方朝臣不被沙汰、依殿下仰、藏人左少弁兼光申沙汰
云々、後日通親朝臣談曰、天曆、左中将源延光為勅使、依彼例可勲仕之由有

仰、而今朝自本院右中弁經一朝臣示送云、可被奏遺詔勅使者欲參入之處、僻
事也、今日不可參、且不可出昇、先今日雖不被奏、若猶後日勲彼使者同人為

今夜勅使如何之由、内々申入殿下、被仰云、全不可寄其事、又後日不必被仰
歟、猶可參者、仍亥終剋參入、先猶於禁裏兼光伝仰云、每事不過思食之由可

申者、即參御墓所、卷纏、件卷纏自崩御、於門外申入、左中将知盛朝臣出逢歸入、
申大理、時忠、歟、日卷之、不帶劍、笏、歸出云、只今已奉斂者、即歸參、付内侍奏之、大外記頼業真人

勘申建春門院崩御新例、是勘長保三年東三条院崩例也、
十一日、甲寅、天晴、未剋着布衣參七条殿、御仏供養已被始行之間也、御導

師權律師範玄、着甲、袈裟、事畢賜布施、權右中弁親宗朝臣、布衣、吉服、去、行之、導師
取僧綱布施、殿上人取導師裏物并凡僧布施、又有院御方一日經、布施色目同
前、但無絹裏、皆紙裏、御導師被物持明院二位取之、先度依不取僧綱布施也、

裏物等殿上人取之、事畢予退出、

参入人

三条大納言実房、按察資賢、

花山院中納言兼雅、予

新中納言実綱、左兵衛督成範、

平宰相教盛、左宰相中將実家、

持明院三位基家、

已上烏帽子、狩衣、薄青色・白等也、予着薄木賊扇如恒、但或持不画、

予扇不画、

公卿座撤御簾、不懸物、置如元、高麗也、去夜不撤御簾、今朝撤歟、

寢殿立公卿座之間南西懸伊与簾、西面方同懸伊与簾、以白革為懸緒、左中弁

重方朝臣束帶、中務權大輔經家朝臣束帶、右衛門佐光長衣冠、皆卷纓・吉

服也、自余布衣、今日無平礼之人、又着御服之人不見、每事如夢、

十二日、乙卯、天晴、着布衣、午終剋参七条殿、散花之間也、前大納言実定

独候御前座、予又参着、此後人々漸参入、御導師阿闍梨実頭、袈裟、為勤御導師着甲、

事畢賜布施、参同見先歟、関白不令取布施給、前大納言取被物、殿上人取

裏物、僧綱以下裏物公卿取之、按察資賢、第今度不取一日經被物取之、是親

宗朝臣所示也、予取布施畢退出、

参入人

関白直衣、垂纓、前大納言実定、前治部卿光隆、按察資賢、予 右兵衛督

頼盛 新宰相朝方、修理大夫信隆、兵部卿信範、賜素服人也、未着服也、長

花山院中納言兼雅、逢、河原、平宰相教盛、逢、門外、六角宰相家通、逢、

今日被奏建春門院遺令、使右中將通親朝臣、長保、東三条遺令使右中將実成朝臣、彼例歟、於内裏門外

開院、付大外記清原頼業真人奏之、頼業申左大臣、長保、右大臣顯光公奏之例也、其後皆納言、弁長方朝臣奏聞之、

後日通親朝臣云、今朝右中弁經朝臣示送云、可奏遺令者、仍参入候殿上

北方、經朝臣云、早可奏者、通親云、何様可奏哉、經朝臣云、只任先

例可計申、通親云、奉仰可申御使、不可自由事也者、即参内立門外、頼業

真人出逢申云、建春門院遺令山陵立テ国忌ヲ不可置、可被停止素服・挙哀

者、頼業云、申御返事、暫可令候給者、婦入申上卿、々々云、荷前可被停

之由、不被申歟、頼業申云、同前被申也と申ケル之由、後日所承也、荷前

事不申也、不被置国忌ニ籠歟、又不申崩御日也、此事先々不必奉返事云々、

然而暫徘徊之間、頼業帰出云、サ申候畢者、聞食と被仰歟、又曰、勘見例、

不給本所素服之人勤此役事不見者也、只長保、右中將実成朝臣勤此使、以

一方例被催如何、実朝臣給素服之人也、注申此旨似無沙汰者、

応禁宴飲・作楽・着美服事

右左少弁藤原朝臣兼光伝宣、左大臣宣、素服・挙哀、随固遺令徒停止、而卒

土黎元何無心喪之礼、制、宜仰文武諸司、禁件尋事暮年也、同得逮先者、

安元二年七月十二日左大史小槻宿禰在判、奉

応停止素服・挙哀事

右左少弁藤原朝臣兼光伝宣、左大臣宣、今月八日前建春門院崩酒須御力挙哀、依

例行之、而今依遺令停止如件、宜仰文武諸司令知此由者、

安元二年七月十二日左大史小槻宿禰在判、奉

左大臣宣、奉勅、依建春門院遺令山陵荷前宜令停止者、

安元二年七月十二日大外記兼博士越中權守清原真人頼業奉

今ヤ主上御倚廬云々、後聞、東対開院也、東午廊為倚廬、件廊東方向築垣、殿上

東土間件廊為闕白御所、之時藏人所也、為殿上敷平板敷、築垣副、有細路、剋限出御對面、左中將泰通朝臣取御劍、右中將隆房朝臣執璽、闕白着直衣令候御後給、侍臣候脂燭、為衛府人帶弓箭、

賜素服人

左大臣經、吉服、垂纓參入、

天曆、右大臣殿、九条、長保、右大臣 頭光、賜之、其後皆大納言以下賜之、今度、長保例云々、仍兼日以頭弁長方被給之如何之由、被仰遣左大臣計(許)、被申云、彼二代各為親戚、於身已為外人、何樣可候哉、但可隨仰者、此旨奏聞云、さ被申ハさこそ、左府聞此旨、又被申云、可申存旨之由被仰、仍申子細許也、只可隨仰也者、仰云、賜者可宜歟者、

右大將 重盛、藤大納言 実国、

五条中納言 邦綱、宰相中將 実守、弓箭、向陣外、撤之、着素服云々、藏人 右中弁長方朝臣

相当母堂衰日、為之如何之由先日示合、予答云、長保度、公任卿問此事於実資公、不可忌之由有答、若可依彼例歟、但近年(ナ)之法事、異上古可在賢慮之由答畢、其後又被示送云、上古事、猶異近代之法、欲相避而有障之人不給之云々、然者件時不可參内之処、奉行渡御倚廬事、仍必可祇候也、為之如何、予答云、然者至于渡御之時雖祇候、欲向北陣之時忽称障退出何事之有哉、其後不可有奉行事、又不可備御前役之故也者、而頭中將実一朝臣依輕服日数内此事先例可尋、正曆、粟田闕白并道綱卿為重服、而円融院御服依例被着帶許云々、可尋知事也、不賜之、藏人左少弁兼光為母衰日、藏人右少弁光雅為妻衰日、各皆有是等憚、職事一人不着之、還又有憚、為之如何之由示合之間、闕白令漏聞此事被仰云、皆悉不着者、尤可無便、任公儀只可着者歟者、職事等自由之時致狐疑仰已切畢、称神妙之由、皆着之云々、

右中將泰通朝臣 右少將隆房朝臣 左少將通資朝臣
右少將中宮權亮惟盛朝臣

藏人左少弁兼光

藏人右少弁左衛門權佐光雅

藏人勘解由次官中宮大進基親

公卿左府已下先被候殿上、剋限起座、經殿上東築垣内被向門外、此間各前、驅取松明、前行、件門西洞院西北門、是擬左兵衛陣也、然而、北面無門、只有築垣下門許、仍以此門擬朔平門歟、頭弁向間、藏人取指燭在前、左府以下素服、藏人伝献之、頭已下出納伝之、各着畢、左大臣以下公卿乍着素服婦着殿上、次被着陣、即起座、脱之賜陣官、々々書各銘可預置也、而藏人陣官不候、希有官人一人祇候之間、出納蜜々書之、又取置之、頭已下於殿上脱之賜出納、々々書銘預置之、此後各分散云々、

右中將通親朝臣雖為近習人、依勤遣令使不給素服云々、

女房

典侍 右衛門督局、件人前典侍也、新中納言実綱女、

掌侍二人 少納言、侍從、

命婦二人 信濃、上総、

藏人二人 甲斐、右衛門佐、

闕白殿今日着直衣吉服、垂纓、令參院給、令退出給之後、着衣冠吉服、垂纓、令參内給、主上倚廬三渡御之後、於内御宿所令着鈍色直衣被給云々、不令賜素服也、十三日、丙辰、陰晴不定、午剋着布衣參七条殿、御仏供養未始、頃之被始云々、予・持明院三位許着座、其後漸人々參入、御導師阿闍梨公胤、事畢賜布施、三条大納言取被物、按察已下取僧綱布施、次藤大納言取一日經被物、殿上人取被物、次被行例時、此間予退出、

参入人

三条大納言 実房、布衣、立烏帽子、 藤大納言 美国、着鈍色狩衣・好袴、去、夜自内裏賜素服、仍着之、 按察資賢、
 予 左兵衛督成範、右兵衛督頼盛、新宰相朝方、平宰相教盛、左宰
 相中将実家、持明院三位基家、左京大夫脩範、
 已上吉服、布衣、皆立烏帽子、

〔頭書〕
 「伝聞、今日祇候内裏人装束事、

倚廬間武官事

頭中将実宗 吉服、依警固卷纓、不懸綬、不帶弓箭、劍、此人不賜素服之人也、
 源中将通親 吉服、卷纓、懸綬、此人不可賜素服人也、雖御倚廬之間、猶可帶弓箭之由存云々、但弓箭不帶、以懸綬可知存旨、

十四日、丁巳、天晴、今日建春門院崩後当初七日、仍着衣冠、垂纓、午剋參七
 条殿、今朝懺法之次被行每日御仏供養、但至于一日經者初七日御仏供養云々、
 撤初日御 等身阿弥陀、至于今日被奉立每日御仏後、 於北、其前奉立等身普賢菩薩像、今度、仏經併法皇御役設料所設置之、 仍
 也、其前立花机一脚、其前立前机一脚、置鈴・杵等如恒、御導師為真言師、
 仍役供養法具、其前置札盤一脚、其左右立脇机一脚置塗香灑水器等、西孫庇
 御經十二部一日經等分置之、南西角簀子南北妻敷紫端帖一枚為堂童子座、南
 庭西南立御誦經幄一字、御車宿東廊母屋巡二間也、二間立之、未覆幔忽一間為二間最勝寺幄云々、 其内中央東西妻敷小
 筵一枚、其上東西妻立案一脚、其上嗟嘍物麻布十段為一結也、諷誦文兼取之
 置末座僧前經机、别当时忠、賜素服在渡殿、簾内加署云々、 未剋僧昇、皆鈍色、着、甲袈裟、 被始御仏供養、
 御導師權大僧都勝憲、真言師也、仍、 公卿着座、法用之間堂童子左兵衛佐基宗垂
 纓、少納言信季、卷纓、 着座、賦花筥如恒、勝憲弁說如誦、衆人感歎、啓白畢
 有供養法、此間猶警筥、在最末人座、 事畢賜布施、導師被物六重、一重者一、日經分、 絹裏二、一重者一、日經分、 此外
 葉孫權樟革皮子之類四五許、題名僧被物一重、一日經分、 絹裏一、同、紙裏一、一日經分、 置
 布施畢予退出、今日解熟、如直心神、

参入人

源大納言 定房、吉服、衣冠、垂纓、
 三条大納言 实房、吉服、直衣、卷纓、
 藤大納言 美国、諒闇装束也、鈍色平絹直衣、同色練絹好袴、白帷、白張下袴、無文冠、卷纓、扇、浅黄弘彫骨、
 中御門中納言 宗家、吉服、衣冠、垂纓、
 花山院中納言 兼雅、同、
 藤中納言 資長、吉服、直衣、垂纓、
 予 吉服、衣冠、垂纓、
 新中納言 实綱、吉服、直衣、卷纓、
 右兵衛督 頼盛、吉服、同、 新宰相 朝方、吉服、直衣、垂纓、
 平宰相 教盛、吉服、束帶、卷纓、
 左宰相中将 実家、吉服、直衣、卷纓、
 六角宰相 家通、吉服、直衣、垂纓、
 兵部卿 信範、吉服、直衣、此入賜院御服之人也、卷纓、
 左京大夫 脩範、吉服、直衣、垂纓、
 殿上人衣冠・束带相交、皆卷纓・吉服、但右少将隆房朝臣着諒闇装束、賜内
 裏素服之人也、藏人等吉服、衣冠、卷纓、賜内裏素服之人、公卿藤大納言・
 殿上人隆房朝臣之外今日不参、
 今日職事皆不参、可取布施哉、其後有無各有称旨等云々、内藏頭親信朝臣不
 参、此間称可有憚、可取布施不参、催院御方、
 近衛司自初日皆取之不憚、中宮々司等今日不見、
 今日人々装束不同事 如本、
 今日院西北渡殿南面伊与簾付物忌、寢殿与公卿座之間廊、素服人々候所也、 寢殿不付之、亡者初七日

還來之由、有世俗說之故也、内裏同御物忌云々、

十五日、戊午、天晴、未剋着束帶吉服、垂纓、着布衣、欲參七条殿、而最勝・延勝兩昨日、雖可着衣冠、聊廻思慮、着束帶、參七条殿、頃之御仏供養被始行、御導師範玄、事畢賜布施、一日經布施相交賜之、被物相違題名、僧料絹裏公卿取之、一日經分紙裏殿上人取之、

参入人

前大納言実定、布衣、立烏帽子、 前治部卿光隆、

按察資賢、布衣、平礼、 予

新中納言実綱、先参法勝寺、上卿新大納言成親依重服不参、仍為代参入於彼寺、垂纓、参此院之時卷纓云々、所着直衣也、

左兵衛督成範、 右兵衛督頼盛、

平宰相教盛、已上布衣、立烏帽子、

持明院三位基家、束帶、参法勝寺云々、

左京大夫脩範、布衣、立烏帽子、

殿上人布衣、藏人左少弁兼光着諒闇装束、不取布施、依職事歟、先々取之歟、可尋、

十六日、己未、天晴、今日不参七条殿、依所劳病痾、也、

公家被定故建春門院二七日御誦經云々、初七日々次不宜、仍不被立自二七日可被立之也、来廿二日可被立云々、

諷誦諸寺使

常住寺

散位源朝臣仲頼

隼人正橋朝臣清定

仁和寺

散位橘朝臣以房

散位源朝臣範実

広隆寺

散位藤原朝臣懷綱

前大和守藤原朝臣重弘

東寺

甲斐權守源朝臣国行

散位藤原朝臣光景

西寺

散位藤原朝臣貞親

散位藤原朝臣貞光

法性寺

散位藤原朝臣懷家

散位中原朝臣経長

最勝光院

散位藤原朝臣範実

但馬權守源朝臣惟頼

(安元) 天安二年七月十六日

之、 今日本院被行諸寺御誦經云々、初七日雖相当去十四日、依日次不宜今日被修

法勝寺中務權大輔、經家朝臣、 最勝寺治部卿頭、

蓮華王院遠江守季能朝臣、

最勝光院但馬守光憲朝臣、

東寺 右馬權
守基輔、 西寺 左兵衛
佐基範、

玠皇寺 少納言
信季、

已上前院殿上人東帶、・庁官一人各相副御誦經布各三段・香一裹、

後日經家朝臣云、使等雖不入向寺々、御誦經物 入折櫃居高土环、
布名香一裹、 設庁、於中門

外辺相尋之、仕丁 着退
紅、 持來之、庁官一人 着衣
冠、 相副之向法勝寺金堂、堂層正

面西間副端方敷高麗帖一枚、使着之、同正面東間紫端帖一枚、三綱一人着之、

都威那歟、着
鈍色裝束、 御導師璋猷 已講、
束帶、 啓白畢之後可奉御卷数之由、仰寺家、是依權右

少弁親宗朝臣命也、而寺家申不存之由、然而此仰可書進云々、被付庁官也、

使不可帰参之由權弁示之、仍退出了者、後聞、使着衣冠云々、

十七日、庚申、天晴、今日猶依所勞不参七条殿、左大臣・右大将重盛、兩人

着諒闇直衣被参七条殿云々、藏被賜内素服之人也、日来不被参、今日始被参

也、公卿十三人参入云々、

(六条) 戊剋新院崩 御年十二歳、未加元服、年来建春門院奉養育、同御七条殿、女院御腦之
間、新院又重惱御、々脚氣邪氣相加云々、去月下旬令渡邦綱卿東山堂給、 去月

十二日高松院崩、今日八月建春門院崩、兩月之間三院崩、上古未聞、如夢如

何、

十九日、壬戌、雨下、午後止、今夜新院御葬送栖霞寺云々、邦綱卿東山為御

葬家、僧七人籠云々、

廿一日、甲子、天晴、今日故女院二七日也、伝聞、御仏三尺藥師一体、是御

平生之時御逆修料被始御仏云々、至于初七日被兩院仏而忽有此儀云々、御導

師範玄、今日本院被立二七日御誦經使、

尊勝寺 遠江守
親美、 円勝寺 散位
尊親、

蓮花王院 前筑前
守以政、

最勝光院 前伊賀
守雅亮、

安樂心院 阿波權
守仲基、 十楽院 散位
宗頼、

珍皇寺 前河内
守泰経、

廿二日、乙丑、天晴、公家被行故建春門院二七日御誦經、見去十六日定文、昨日
也、今度始被立也、
後々又可扱日次也、 上卿藤大納言、実国、帶劍、不持笏、此人賜素服、又参上御

倚廬之故也、不審、
主上御
倚廬、 右少将雅賢朝臣、左兵衛佐光実、上卿同藤大納言、

被行解陣云々、不審、
主上御
倚廬、 右少将雅賢朝臣、左兵衛佐光実、上卿同藤大納言、

廿三日、丙寅、天晴、右衛門權佐光長来云、去十四日関白 自去十二日着
諒闇御裝束給、 令参内、

御隨身等皆悉諒闇裝束参入、而去廿一日参院給之時御隨身不着、件装束令木

賊之様色、是内々仰歟、今日令参給御隨身皆着諒闇裝束、去二日已後着吉服

事、只廿一日許云々、

今日冷泉殿 故女院
御姉、 於御墓所有御仏事、三尺地藏經三部、導師公胤、布施、導

師被物三重、单重一領、取十三題名僧三口、即三昧僧也、生衣一重、凡各六

領、無布施誦經物十段、此御堂未被置、預御所、須参向云々、

廿四日、丁卯、天晴、今日院始奉為建春門院有御仏供養、連々可有此事、而

者不堪懇志、為早速図繪御仏被奉供養、右大弁俊経卿草御願文、教長入道清

書、有諱云々、

御導師權大僧都觀智、公卿着直衣可参之由、今朝被仰下云々、新中納言美綱、

不知其旨、着布衣参入、仍退出云々、御仏三幅、阿弥陀三尊、御經金泥一部、

素紙十二部、御筆阿弥陀經、御誦經百段、御布施導師被物七重、单重三領、

鈍色裝束凡廿五、米十石、題名僧被物一重、单重一領、凡各五、米五石、須

二人絹二疋、綿卅両、米一石、予猶依所勞不参、

今夜自倚廬還御本殿云々、

今日有開闔・解陣事、上卿藤大納言実国、着座、帶劍、不取笏、主上今夜自

倚廬可還御、仍猶不取笏也、

公家被定七本定个日御誦經来月二日可被立云々、

諷誦諸使三七歟

嘉祥寺 散位藤原朝臣光輔、散位藤原朝臣光綱、

勸修寺 散位藤原朝臣敦親、前大和守藤原朝臣重弘、

花山院 内藏助三善朝臣倫康、散位橘朝臣正清、

禪林寺 散位藤原朝臣懷綱、因幡權守藤原朝臣光重、

極楽寺 散位藤原朝臣貞親、散位藤原朝臣貞光、

安禪寺 但馬權守源朝臣惟賴、散位中原朝臣信長、

最勝光院 散位源朝臣範実、參河權守藤原朝臣尹範、

安元二年七月廿四日

被下ツルハミ椽宣旨云々、

正二位行權大納言兼右近衛大将平朝臣重盛宣、奉勅、諒闇之間殿上侍臣宜聽

着椽袍者、

安元二年七月廿四日權少外記中原兼茂奉

廿五日、戊辰、天晴、源中納言雅賴、被示送云、保元、諒闇事一切不覺悟解

陣并音奏・警蹕、被仰下云、若注置者可注、然者八月廿一日有兩事之由答畢、

彼人為五位藏人宣下也、不記歟、

廿八日、辛未、天晴、今日故女院三七日也、伝聞、御仏三尺弥勒一体、御導

師実顯云々、本院被立三七日御誦行使云々、

蓮花王院 前筑前守以政、 最勝光院 散位盛信、

清水寺 前周防守時盛、 珍皇寺 散位雅行、

広隆寺 散位長綱、 仁和寺 散位重幸、

醍醐寺 太皇太后宮權大進仲頼、

已上前院北面衆之外被催加院北面事、

廿九日、壬申、天晴、主税助安倍時晴朝臣来有身固事、未剋參七条殿、自去十日初參入、 今日始着諒闇束帶也、着諒闇裝束強不扞日次云々、然而自由之時、又避惡日不可有難、今日非重復・衰日等、仍着之、着束帶者為

病、仍不出仕、參内也、初度又雖布衣不可有難歟、裝束事見永万記、仍重不注之、

御仏供養被始行、權右中弁親宗朝臣出西北渡殿至于僧座、仰可始行之由、次

来公卿座告之、公卿着御前座、御導師阿闍梨公胤、事畢賜布施、次第如先々、

次被行例時、此時公卿不候座、頃之退出、

參入人

前大納言

実定、諒闇布衣、

三条大納言 実房、吉服、薄青、狩衣、

前治部卿 光隆、長絹、狩衣、平絹、淺黄、奴袴、

中御門中納言 宗家、諒闇直衣、平絹也、

花山院中納言 兼雅、諒闇布衣、

予 束帶、持笏、予家説如此、

新宰相 朝方、諒闇布衣、

左宰相權中將 実家、同、但生奴袴、於狩衣如他人、縫手下不差括、

六角宰相 家通、諒闇布衣、

右宰相中將 実守、同、実家卿、

堀川宰相 頼定、諒闇布衣、

持明院三位 基家、同、

布衣人皆立烏帽子、諒闇裝束人扇用淺黄紙、花山納言一人弘六骨、自

余皆彫骨、或黒染、或白木彫骨、甚無謂歟、

殿上人皆諒闇布衣、但侍從家俊吉服、權右中弁親宗朝臣着服、布々衣、尻長、無二親之故歟、
藏人二人吉服、着歟、藤原俊宗尻長、源時長切尻、父忠光見存、

主典代宗家着服敷之後候中門廊砌下、自余或着諒闇、或吉服、

昨日当三七日、件御誦經幄撤覆、不撤骨、

今朝女房若狹局御乳母也、有御仏供養懺法、畢即行之云々、導師權律師範玄、件

御仏立像三尺积迦白木、飯奉立每日御仏西方、先々当七日御仏被立每日

御仏、而今日不令見給、依奉立此御仏被撤歟、御經金泥一部、色紙六部、諷

誦六十段、導師布施被物五重、单重五領、鈍色裝束凡廿八、米五石、題名僧

被物二重、单重二領、凡各十、米各三石、預二人被物一重、单衣一領、凡各

五、米三石、所々施行米十石、清水坂葉王寺私樵田左右獄監僧供等也、

定能卿記 建春門院崩、後白河妃、高倉母后

安元二年七月八日、建春門院午終許絶入給、日禁、二禁、申終崩御云々、今日禁裏垂

御簾被止音奏、

十日、御葬送也、土葬、今日御入棺役、左少將時実、權右中弁親宗、僧都美修、如常御幸云々、

但御車簾軒云々、侍六人取松明前行、先是有御仏事、是每日御仏事也、奉納

後初日御仏事、公卿着座、太相國忠親、奉行人也、烏帽子、直衣、左兵衛督成範直衣、

卷纓、自余布衣、

十一日、御仏事如夜前、左中弁重方、中務權大輔經家、左衛門權佐光長等卷

纓、自余布衣、御前僧十三人、但力、実、護摩、師不着座、内舍人護摩、

十二日、今夕主上移御倚廬、御所公卿・侍臣等賜素服云々、又被仰警固、

予不參、後聞、被垂御簾之後人々皆卷纓云々、但閔白不然云々、

十三日、今日御仏事如常、藤大納言実国、一人着諒闇布衣、自公家給素服人也、

十四日、朝懺法之次每日有御仏事、公卿五・六人許被参来、奉被始初七日御
仏事、源大納言定房、中御門中納言宗家、花山院納言兼雅、堀川中納言忠親、
以上衣冠、垂纓、

三条大納言実房、藤大納言実国、諒闇、左兵衛督頼盛、宰相中将実家、兵部卿

信範、已上直衣、藤中納言資長、宰相朝方、三位信隆・脩範、已上直衣、侍從基家

一人垂纓、右少將隆房、諒闇束帶、扇香紙、有薄位袍、自公家賜素服人也、

橡宣旨以前、仍着位袍云々、伝聞、雖給素服、依無日次或着吉服、或不尋日

次即日着之云々、能々可尋知事也、

十六日、左府・右大將重盛、共給公家素服人也、着諒闇直衣参院、取布施云々、宰相頼定

束帶、不卷纓云々、此間人々所為甚以様々也、

十七日、御仏事如常、通資着諒闇束帶、如隆房、抑院中素服人々多、以狩衣尻長

云々、知盛朝臣一人短尻、是花山納言説云々、有二親人云々、或又長、尤不

審、無二親人皆尻長也、今日右宰相中將実守、公家素服人也、着諒闇直衣参上、自余公

卿吉服、又嘉承中右記云、亡者御之時卷纓也、葬送之後垂纓、但可尋云々、

又或人云、御堂子孫後聞、必不依被子孫云々、垂纓也、伝聞、頭弁長方・右中將泰通但件夜不供奉

云々、藏人大進基親賜素服人也、長方・基親等渡御倚廬御所夜雖着素服、

此間吉服、依無日次不着諒闇云々、此外人皆件夜已後着之云々、

今日新院崩御、四十日内院号人三人崩御事、未聞及事也、

廿一日、二七日也、如初七日、公卿裝束如前々、中納言実綱卿、直衣、卷纓、三位基

家、衣冠、自余公卿裝束見初七日之所、閔白參給、只取布施給、着御諒闇、御

隨身等吉服、右大將重盛、隨身皆悉着諒闇、今日權右中弁親宗着服布衣布、

冠也、卷纓、行事也、殿上人或束帶、此間束帶何例哉、予衣冠、

廿二日、御仏事如常、六角宰相家通束帶、垂纓、中御門中納言宗家、雖束帶

不持笏、又今日平宰相教盛着諒闇布衣、非素服、人也、又殿上人数少、本所素服人々取布施布衣、布、或狩衣尻、今日被仰解陣、

廿三日、左兵衛督成範又着諒闇、非素服、人也、伝聞、去廿日内府師、被着諒闇云々、又此間右少将公時素服、人、着椽袍参内云々、椽宣旨以前、然而如此、其趣様々、尤不審々々、可尋或人云々、此趣猶非云々、

嘉承、内大臣于時、少将、大、椽宣旨以前位袍也、寛徳資房記、宣旨以前不可着之由見畢、

廿四日、今日可有法皇御仏事、仍每日御仏事儀法之次被行之、素服公卿・侍臣等取布施、左衛門督、宗盛、尻短、時忠、兵部卿、信範、同、公卿皆絹、殿上人布也、申時許自院御方有御仏事、公卿直衣、按察垂纓、殿上人衣冠・束带少々相交、今日又右大臣殿、大納言実房、宰相朝方・家通等着諒闇等、今日予猶卷纓、失也、後日大臣白川、院、中将、内大臣于時、解陣以後垂纓給也、今日予失不可為例也、右中将頼実・侍従実明等給衣冠之由、着諒闇布衣、生单、仍不取布施、日次宜之間、退出之後予着始諒闇、須着束带参内、然而今日立方御仏事等指合之間、臨夜着初之、不出仕程遅々之間着始布衣、今日還御本殿、被下椽宣旨、不見其儀云々、

廿五日、着諒闇之後始着布衣参院、御仏事如常、公卿十人許着諒闇布衣、光隆卿一人吉服、殿上人七・八人参、過半分諒闇、皆扇花田無薄、今日実定卿非素服、素服、人、兩人平礼、経家朝臣一人差結開田下、侍従実明着生单、依壮年歟、自余皆帷、実守卿束带、用烏犀带、公家素服、人也、帳单白、、

廿六日、御仏事如常、公卿十余人参上、吉服二人、実房、頼定、殿上人之数同前、過半着諒闇、

諒闇、予衣冠、信範卿素服人、一人取布施、衣冠、平絹、衣冠、黑指貫、、廿九日、今日女房若州御仏事供養――右馬権頭基輔開田下差給如経家、侍従家俊・右少将維盛同之、依為官司不取布施、同八月五日、女房宗盛、卿、御仏事、六日、今日四七日也、其次権右中弁親宗依仏事今日束带・衣冠相交、左衛門佐保盛一人吉服、公卿・侍臣皆諒闇、右少将公時紅下袴、生单、指貫、無腹、白、、壯年人如此云々、或雖壯年人白下袴、今日素服人々布施、凡此間人数多之時、素服之人不取布施、人数少時取之、但兵部卿大略每度取之、七日、明日御月忌也、而日次不宜、初度御月忌以吉日可被行云々、中陰不被行、而九月八日々、次不宜、仍今日被行、人々衣冠、、八日、院御方御仏事、公卿直衣、侍臣衣冠、九日、依陪膳参内、見殿上不立御椅子、借円座、黒染大盤、鈍色縁畳、即供御膳、不警蹕、御大盤台ヲ不昇、先例也、不立大床子、平敷御座、被取納管弦具、鈍色御帳也、垂御簾、五十日以後称警蹕上御簾云々、上古或一周忌後云々、十三日、五七日也、予不見、伝聞、六十僧也、公卿或带劍、或不带云々、寛徳資房記曰、依関白宇治、殿、仰人々不带劍云々、今日関白不带劍給云々、自余公卿五分之三、带劍、(頭書)「不带劍例、宇治殿説云々、」

申次右京大夫泰經婦出告召之由、即昇自中門廊妻戸經簀子・公卿座前等入正
面間就御導師左方、依便、伏取給之、仰云、大法師等、右廻經本路退下、無緣、依中陰之、次左少
將通資朝臣為御誦經使參上、着鶴食袍、非本官役故也、是先例也、帶申次中務
權大輔經家朝臣昇路如予、經公卿座末着円座、其座有公卿座、未程、兼敷之、即退下、御誦經使上、程題名之後、
可參也、頗布施取等不多、仍予・通資朝臣等解劍、取布施、今日參上公卿劍・
笏之条各別、

左府、經、左大將重盛、大納言隆房・実房・実国、中納言宗家・兼雅・忠親・
資長、宰相教盛・家通・実家・頼定等正劍・笏、

内府、師、前大納言実家、大納言実房、中納言資賢・時忠、素服、雅頼、參議
成範・実守、三位信範、素服、脩範、以上不带劍・笏、

但中御門中納言每日御仏事不把笏、今日取之、人々成不審、相尋彼納言之処、
人々布衣、每日御仏事不可取笏、如此皆悉束帶、為晴儀之時可取笏云々、於
自余公卿者今日帶劍・笏人着束帶之時雖例講猶帶劍・笏、今日不带々人又例
講之時不带、中納言所為人々頗不審、

最勝光院 子、蓮花王院、右中将、光能卿、

法勝寺、親卿、最勝寺、同頼、

珍皇寺、治部卿、醍醐寺、右少弁、家光、

勸入寺、右馬權、頭基輔、

序官一人為小使、相具人々衣冠、光能・通親束帶、今日公卿直衣、御誦經三
个度云々、初七日・五七日・今日也、後聞、今日主殿司上日女官賜祿、長絹二疋、綿、
殿上簡・大盤等取納御倉云々、

諒闇裝束事

夏

位袍、無文、コメ、色、依位、如常、一客隨本官之時用之、雲、
橡、夏冬通用、雲客着之、於闕腋者必用位袍、而、
宗通卿一家猶着橡闕腋、雖公卿不着位袍、
半比下重、鈍色、平絹、壯、年人或コメ、
張単白、帷白、表練、鈍色、平絹、裏如常、

布衣

狩衣、縫田下、不着結、或、壯年人開田下差結、

指貫、表裏同、但生也、冬、練也、以上鈍色、

単・帷等如常、下袴白、壯年人、或紅、

冬

位袍、表平絹、裏鈍、色、或如本、橡同夏、

半比下重、表裏鈍色、平絹、栢単白

布衣

狩衣同夏、指貫練也、

夏、鈍色、平絹、冬、表裏、鈍色、

物具

冠、無文、卷纒、差懸如常、笏如常、帶、烏犀革、カハ、公卿擲犀、或猶烏犀、素服人此也、劍、鞘黒、自余事如常、但裝束革無文藍革、

平緒、鈍色、或、香無縫物、弓、如六位、但タシトツカ等鈍色、白、カハ如常、結二所鈍色糸卷之、

胡籙、如六位裝束、無文、藍草、丸緒、鈍色、

靴、如本、但火セン、鈍色、半靴同之、浅沓、如本、裏白平、或鈍色、鞍、如六位、緒螺鈿也、行、幸之時物、或用無文物、

隨身裝束

狩袴、鈍色、壯、年人或白、自余如常、打衣、不、打之、

劍・胡籙等裝束、無文藍革、若紫、無前、緒、或有之、無文可尋、

丸緒鈍色、

同九月二日、依陪膳參内、音奏被仰否相尋藏人之、去月廿九日被仰音奏云々、仍称警蹕、藏人奏御飯モノ、被上御殿御簾也、寛徳以往一周忌以後被仰音奏、

寛徳已後中陰日也、已後被仰音奏、於今者大略流例歟、抑中陰之間職事并内

藏頭親信、中宮々司等不取布施、又素服人々中陰以後着衣布衣、此時皆切

狩衣尻、

(安五三年)同四月十五日、參内、抑諒闇年蘆簾之上可懸奏否事、今日藏人所不審也、仍

密々相尋別当、忠親、於保元者懸畢、於可否者不知云々、又藏人大進基親云、

保元依諒闇不懸之由有勅、父親範、入道説云々、兩人説各別也、尤不審也、

仍予不答分明、藏人付基親説不懸云々、進内侍所了云々、於呂蒲者茸之由、

見旧記、猶可尋、

同五月九日、參殿、々上皆茸呂蒲、是雖諒闇如此、先例也、

同七月九日、被勘大祓日時、上卿源中納言雅頼、

十日、丁未、今日諒闇限滿大祓也、今朝兩貫首并諒闇中補藏人被下禁色宣旨、

侍臣兩三同被下雜袍宣旨云々、未剋參内、卷纏、有文裝束、固文袴、是皆殿下御裝束、藏人右少弁光雅、

一藤判官長俊奉仕吉御裝束、但管見具自来月、須之藏人左少弁兼光垂纓、參入奏大

祓了之由、伝聞、宰相長方朝臣於朱雀門前打幄、門燒失、故也、行之云々、吉御衣遅々、

并殿下御遲參之間御禊遅々、酉時許出御々禊御座、有文御冠、卷纏、無文二藍御直衣、紅御袴等也、関白

令御座東間長押供之、御座南面也、藏人弁光雅取散米、相不見、次宮主献大麻、予

供之、次宮主着座、此間令置諒闇御裝束於宮主座傍、御禊畢宮主退出、内藏官人被向

河原、宮主又解除云々、次撤御贖物、此間予申殿下云、先可垂御纓如何、殿下仰云、先可

撤御贖物、仍先撤之、次帰參、欲垂御纓、件木給藏人了、猶垂纓後可入御、但関白定有令存体様歟、

関白以下皆以垂纓了、次於関白御直廬有吉書、先官方左中弁重方、次藏人方

予、帶劍・笏、作法如常、内藏寮請奏也、次政所左少弁兼光、次於御前又奏覽、先官方、次藏人方

予、不帶劍、例也、先登御座、次御殿出、官方吉書了後予挿先跪御殿坤角、御殿西同也、蒙御

目、称唯進寄、跪御座南間膝行昇長押、又膝行進之退帰、觀覽了置杖於長押

下、右方、又膝行給文結申、其作法如常、兼引裏紙如常、退帰立杖於殿上、出

陣下告之、藏人指脂燭、上卿權中納言実綱、作法如常、予退出、畢頭權中将光能可

勤陪膳云々、仍先是參上、有文裝束、夕膳依当内藏頭云々、可勤云々、皆供魚

味云々、自今日三个日御修法々僧不可參内云々、

信範記 建春門院崩、在位高、在六条院崩、倉院。

安元二年七月八日、辛未、申刻事一定、今国母仙院后位以後十二年、進止世

務九廻、御年卅六、周章之間記録難為者也、事一定由、被申内裏之後、昼御

座下格子垂簾、不供昼御座膳、止音奏・警蹕、不取御椅子覆、内豎不奏時、

瀧口不名謁之、

晚頭召掃部頭季弘朝臣内々被問次第・日次等、此間以大理法皇仰云、此事自

違例出来、尤無便、大理沙汰之上殊可加言、院司奉行等各不慮思食被口入者、

大理為中宮權大夫、依無便辭退畢、

戌剋許奉直御体、左衛門督・別当等祇候御所、左中将知盛朝臣・少將時実朝

臣・權右中弁親宗朝臣・右少將時家・少僧都実修・阿闍梨性守等勤役、親宗

切御座四方取棄縁薦等、乍面莖奉直北首、以篋為枕、御首上供灯、向北、又

立経机、其上居火舎一口焚香、御所辺立廻屏風・几帳等、但炎氣之間可有有

心、可供寒熱李節也、近習人々・女房等不断祇候、此外今夜無別事、下官退

出、大理已下役人等祇候給、

九日、壬子、依重日每事無沙汰、

今日供御手水、女房陪膳、御手洗椽如常、次供膳、式目如常、但精進御菜用土器、陪膳同前、御箸一筋立之、一筋伏之、昇出之、是大理所行云々、今日依院御衰日諸事無沙汰之、

十日、癸丑、早且召季弘朝臣於北西方、大理尋問日次并次第事等、

御入棺今日癸丑、時戌、先可有御沐浴、同時、御葬送同今日、御出戌時、可

一方、裁縫素服時申、着事時戌、是等事所申也、依非葬禮儀不成勘文、以詞申上之、大理令注折紙、為經一院奏也、次御前僧十二口并護摩事・給素服人・

次第事等有法皇御定、入夜持參御棺、在院法華堂、黑漆美麗被塗調、年來被納置云々、次第物具等皆被納

此中、序官六人昇之、遠業率參於南面砌、役人左中將知盛朝臣、少將時実朝臣、權右中弁親宗朝臣、少將時家、僧都実修、阿闍梨性守等六人各以紙檢用

掖帶、昇入南妻戸安御所跡方、次有御沐浴、右衛門尉源為政汲乙方水入土器、居折敷具權杖持參之、判官代源仲時取之立簀子、中將知盛朝臣召名、仲時応

之、中將取之、持參御所奉灑之、次返給畢、次開御棺蓋取出雜物、其中以敷物展御跡奉移御体、但依有事煩不取本御筵奉入棺、次掩野草衣、但不貫取本

御衣、依有事煩也、次御首方御護真言、納筒也、長二尺許、出紙被人筒也、麻布也、絹衣、袈裟裳、已上僧裝束也、糸、針、納括、裹生、次覆蓋、不打釘、依無本支度也、

次覆生絹覆、四幅、長一丈半也、權弁役之、用叶文布二段云々、先是御前僧十二口參上着座、次有御仏經供養、勝憲僧都為導師、無堂童子、粗先例也、次說法畢、布施導

師被物一裹、布施一裹、布五段、題名僧十一口各一裹、布二反、前太相国、權中納言兼雅・忠親、已上布衣、左兵衛督、直衣、卷纒、中納言以下取被物、布施及殿上人、是每日分御仏事也、

次輦御車、庇車、簾懸軒半分、依御棺長也、懸下簾如常、併如尋常儀、序官六人役之、次奉乘御棺、以首入棺役人

役之、屏風・几帳等如常、左衛門督・右衛門督等役之、

此間以御首灯付遠業所持之、松侍五人取松明并六人車前行、用侍所御松、左衛門尉

実重捧火舎、進在車後燒香、本在御首上火舎也、此外侍四人持火舎焚薰、在御車左右、此間入棺役人并公卿已下於南簀子着藁沓下庭、次出御東北中門、御牛、本院御

門督、牛童太郎丸、同持、各布衣、車副二人、自院被召獻之、序官六人付轅、次公卿、左衛門督、右衛門督、已上公卿・侍臣給素服、經宣御所前出東門南

行、經蓮花王院北東行、到法華堂東面、寺門未立、仍計其程、攬放御牛解鞅引入御車、更

差廻以鷄尾方、向堂正面立榻、次導師觀智僧都左、呪願勝憲僧都右、列居御車後、御首方也、導師前立磬、兩師作法了退出、各雖在香呂箱不具草座、無座、尤失也、次輦御車於正面

戸、東面、屏風・几帳兩師役之、次昇下御棺奉安南庇、次解結緒、左右引張垂御棺、奉安穴底、北首、次以平大石五枚、各厚廿五寸、弘二尺、塞穴上、次以四寸

半板數十枚敷滿大石上、又重積、讚岐作者數百果、次又敷板、其上可造仏壇、未造調之、此事畢曉天、左衛門督・右衛門督歸參七条殿、先是事未終以前下官歸參、

脫藁沓洗足、以人形手祓、乘車進前路歸參也、次有初日分御仏事、等身阿弥陀三尊、前供養繪像前立、假仏壇安置之、勅使詞云、不審思食、委可申云々、此条先

例有詞、只今なに事か云々、已違此說、今詞尤如何也如何、又返答詞不及聞、兩金吾被計申歟、可尋、推量奉渡了と歟、藁奏已前勅使無例由有沙汰、

然而依御葬送時不可然止由有議、勅使參入云々、奉殯之後母屋板敷固了為壇所、右衛門督被着素服、其後被候此殿、絹黑狩衣、尻長、同色奴袴、淺黃帷、生合袴、淺黃扇、

主典代大藏卿宗家於法花堂着素服、布狩衣、尻短、同袴、

右中弁経房朝臣御出以前着黒服并素服参入、勒御共、此条無謂、以女在儀渡御、専服者不可候御共、奉渡以後於法花堂着用可勲役也、可謂失錯、

布黒狩衣、尻長、同狩袴、浅黄帷、生袴、

左少将時実朝臣於御堂着之、即勤役尤可然之由、色法本ノマ、同右中弁、

御出以後、河内守光遠・民部丞盛実奉留守事、以竹箒扨御所跡極及洗濯、其後入壇所参仕、勝賢僧都於其所勤修光明真言護摩、

賜素服人々

仁和寺宮

院司、左衛督〔門脱〕、右衛門督、下官、左中将知盛朝臣、右中弁経一朝臣、左馬權

頭信基朝臣、左少将時実朝臣、權右中弁親宗朝臣、已上、木工頭親雅、右少

将時家、大宮權亮為頼、

此外院司、頭弁、頭中将、藏人頭兼光、光雅、藏人次官基親等、非沙汰限、

六位判官代源仲時、藏人藤俊言・同朝房、平時長、三人、主典代大藏大輔宗家、

僧二人、実修僧都、性守阿闍梨、

河内守光遠、侍仲道、遠業、尚家、為貞、宗重、五位、盛実、重長、実重、為

政、信平、時成、

女房三位殿、冷泉殿、内侍、小宰相、帥、若狭、大和、肥後、新大夫、常陸、

和泉、周防、武蔵、右衛門佐、尼、

已上四十五人

今日法皇着御々服、今朝院司泰経朝臣奉仰令掃部頭季弘朝臣勘申日時、調始時、御時、巳、着奏覽畢下知御服所、々々晚頭調進也、戊、

絹黒色御衣、同袈裟、同裳、同御奴袴、浅黄御帷、生合袴、黒御帶、

十二日、乙卯、今日公家移御倚廬、可召錫紵云々、右近中将通親朝臣為薨奏

可参内由、依院仰召遣之、即参入、束帶、右衛門督相逢示子細、中将参内了、右中将光能朝臣束帶、為院御使参内、天下有大事之上、洛中猶不穩、可有御祈者馳参、即帰参申御報了、已下御法事等略之、

晚頭左大臣参着仗座、参議左兵衛督成範卿同候座、車北女房局別台北三個間為倚廬御所、本御厨子所為台盤所、

本殿上口東土馬道飯敷板敷為殿上、立黒漆台盤二脚、無小、日記辛櫃・簡等渡之、入夜前建春門院別当右近衛中将通親朝臣束帶如常、帶劍、参左衛門陣外、西院面四足、以大外記清原真人頼業伝奏遺令、置国忌立山陵事、素服、大外記参着膝突

申左大臣、々々々令頭右大弁長方朝臣奏聞之、還出仰聞食由、次召大外記仰聞食由、被申御返事歟、次大臣召左少弁兼光被仰遺令趣并一周忌之間可禁宴飲・作樂・

着美服之由、次召外記被召諸衛、左右近衛、將監為、左衛門權佐光雅、右衛門權佐光長、左兵衛佐資時、右兵衛佐盛定、左馬允藤原基景、右大允平久季、

兵庫允平貞親等参列、大臣被向之、名謁之後奉上宣退入、三関固関、令外記被付国司畢、

次左大臣被候殿上、次主上移御倚廬、木工造之、頭中将実家朝臣献御草鞋、左中将泰通朝臣・右少将隆房朝臣等取劍璽候前後、次頭弁進御錫紵、藏人弁光雅奉

仕御装束、次人々出左衛門陣外着素服、

左大臣、経、右大将重盛卿、權大納言実国卿、中納言邦綱卿、右宰相中将実守卿、藏人頭右大弁長方朝臣、左中将泰通朝臣、中宮亮重衡朝臣、右少

将隆房朝臣、左少将通資朝臣、右少将維盛朝臣、藏人左少弁兼光、同右少弁光雅、同勘解由次官基親、左少将公時、藏人右衛門尉源兼綱、同大学助源長俊、源基行、高階清定、非藏人同仲国等也、

頭中将実宗朝臣依私輕服日数不入之、

左中将通親朝臣雖第一近習者、依遺令使不入之、

藏人右衛門尉藤能成如頭中将、

公卿素服藏人伝取之、侍臣料出納献之、各於途中乍立被着之、頭弁、五位、

六位藏人実不着之、

次各婦參禁中、公卿着陣座脱之給官人、頭弁以下着殿上座給出納、

次女房於同所有此事、

典侍行子、民部卿、掌子能子(侍)、種子少輔、朝子、侍從、藏人為子上総、弘子

信乃、支子、甲斐、業子、備後、

已上女官授之、

十四日、丁巳、当初七日、依世俗習有御物忌、門々立札、又付御物忌、不付仏前方

人々又付之、院御方同前、外宿人不參、禁中雖不付御物忌、外宿人不參御前

云々、

次初七日御仏事、撤日来阿弥陀三尊、初日供養也、安置等身普賢菩薩、其前供香花、

灯明如常、但前机供仏供鈴杵、供養法具掖机安仏布施法花経第一卷、今日勝

賢僧都為廻導師、仍儲真言供養也、御経十二部並僧座、経机又一曰経一部分

置之、正面簀子立散花机一脚置花筥十二枚、在覆地敷、南庭西辺立御誦経幄一字、

二間、其中立案敷小筵如常、

未剋公卿・侍臣參集、僧昇、道師宿、裝束被鈍色衣、甲袈裟、

法皇出御、次親宗朝臣參、公卿源大納言以下參着御前座、次講演始、大僧都

勝賢為導師、堂童子着座、各衣冠、侍從基家不卷纓、少納言信季卷之、簀子未申角在座、唄散花了、導師表白說法

真言供養、畢布施、

導師被物五重、又一重、一日、布施三裏、色々布一結色革皮子三合、

題名僧十一口各被物一重、布施二裏、一裏一日、

公卿・侍臣皆取之、僧綱布施絹裏、凡僧紙裏併公卿取之、嚴重之至也、

次例時合致畢、公卿退出、僧從誦経暫候、素服座人々、右衛門督衣冠、無文冠、卷纓、平

絹黑袍、奴袴、直衣通用之、此外人々着衣冠、各着素服、皆候簾中如旧例者、脱棄素服可取

布施歟、今日人々不然之、猶可存旧例者、公卿作法不同、是非可然、何說

哉、

源大納言、定房、中納言、宗家・兼雅・忠親、已上宿袍、垂纓、藤大納言実房、新中納言、実綱、右

兵衛督、頼盛、左宰相中将、宗家、下官、已上直衣、卷纓、藤大納言、実国、鈍色直衣、奴袴、無文冠、卷纓、白帷、

浅黄扇、諒闇、中納言、資長、新宰相、朝方、藤宰相、宗通、修理大夫、信隆、左京大夫

脩範、已上直衣、垂纓、平宰相、教盛、殿上人衣冠相交卷纓、

十六日、己未、今日可着素服、予尋日次、今朝退出調裝束、晚頭調出、次請

素服於女院庁、次下庭上乙方、向乙、着之、次着素服、女狩衣、有帶、即服素服、

十七日、庚申、已下講演、此間中務少輔隆成參院御方申云、新院申刻許御氣

色相交、女房奉奇之間不令直給、事一定畢者、法皇被驚仰御歎息、重疊万事

弥不通、上下哀傷之心不知所謝之、

今太上天皇御諱順仁、御年十三、從脱以後九年、猶童体也、依嫡孫御于、

此法皇宮頃年以來御脚病惱有增有減、暫経旬月之間自去月陪增、去五日出

此宮室移給中納言邦綱卿東山六条末家也、是御乳母住宅也、入道參議成頼

卿宿給也、

十八日、辛酉、朝饑法如例、或人々新院多入棺奉移清閑寺辺、即可奉殯山中、

其儀不及沙汰云々、但今夕不行歟、五条中納言沙汰歟、彼御領山寺也、今日雖九欠不

憚歟、設日重日、法皇御衰日等連々相障、ヨツテ、仍所為也、

廿日、癸亥、今日雖当十三日無御物忌事、代々皇后・院宮例無所見之由、金

吾被示之、万寿已後代々^{本ノマ}、本ノマ、久了御喪家雖有物忌儀、於院宮々不被用歟、仍無

其儀之、

廿一日、甲子、第二七也、無御物忌、代々不同、有無有例之上、待賢門院崩御有議定無御物忌、仍無儀也、

廿三日、丙寅、今日人々多着服參入、雖給素服日来扨日次間各及今日歟、左衛門督平絹黑色狩衣、切尻、依父、母二親坐歟、同生指貫、白帷、淺黃無薄扇、左馬權守信基朝臣布黑狩衣、尻長、下官、不令切也、同狩袴、マシマス、白帷、生合袴、武藏前司為頼同前、但切尻、依別当入道諷諫歟、判官代源仲時同着淺木帷、不切尻、藏人俊宗朝臣同前、着白帷・尻長、或切之、

廿四日、丁卯、朝御懺法之次有每日御仏供養、

今日院御仏供養、母屋本仏前立大仏台、奉懸三幅迎接阿弥陀三尊一鋪、錦縁、已下略之、

南庭御誦經幄如每七日立案置調布百端、有諷誦文、按察使資賢卿加署、依院司、上臈也、

廿七日、庚午、朝御懺法、午後御仏供養如例、範玄律師為巡導師、前治部卿以下公卿十余人參入、下官列此内取布施、凡素服者公卿・侍臣取布施、勤堂童子定事也、今度、人々不指出不着座、不勤所役已如孝子、似嚴重、甚以無便、各不知案内歟、不可後例、法皇去中旬御背執熟腫事、御已御二禁歟、數日不增不減、非無怖畏、召付諸陵頭定説、有御療治、奉付膏藥也、其驗殊勝乎、減畢、折節神妙、上下感歎、今日有御浴事、即召定説於御前給御馬、北面下臈二人引之、定説下前庭取綱、再拜、嫡男采女正給劍一腰、次令按察使資賢卿給一階由、被仰定説、元正五位、已、叙四位也、定説合歎喜退出訖、

抑七々中於此御所給御馬、被仰勸賞之条尤不被甘心事也、雖有給物不可及御馬、雖有勸賞可被仰七々以後也、所存如此、莫言一一、

廿八日、辛未、第三七日也、御法事、等略之、

同二年八月二日、甲戌、五七日御法事被定雜事、定文、存之、每七日有御願文、クワン

六日、戊寅、四七日也、被行七个寺御誦經、

十三日、乙酉、今日五七日御法事也、巨細略之、有御願文、

廿日、壬辰、當六七日、朝御懺法之次按察使資賢卿女子行御仏事、前院御在生之間儀窄仕有御息、仍所勤行也、